

死にかけて全部思い出しました!!

登場人物 紹介

イリアス

パーティミウスの護衛。
怪物に襲われていた
彼女を救い、そばに
仕えるようになった。

サディ

エンデールの侍従。
左目に傷があり、
片眼鏡をかけている。

エンデール

異国の皇太子。とある目的のため
パーティミウスを誘拐する。
乙女ゲームの攻略対象では
ないはずだけど……？

ジャービス

貴族。乙女ゲームの攻略
対象の一人。パーティミウス
の事を気にかけている。

タンガレ

謎の人物。
たびたびパーティミウスの
夢に現れる。

シュヴァインシュタイン

公爵。乙女ゲームの攻略対象の
一人。ゲームの王道ルートでは
ヒロインと結ばれる。

クリスティアーナ

第一王女。乙女ゲーム
「スティルの花冠」のヒロインで、
絶世の美少女。

パーティミウス

第二王女。乙女ゲーム
「スティルの花冠」の悪役で、
左足が悪い。前世はゲーム好き
な日本人女性だった。

目の前の、豚のような顔をした怪物を見て、あたしはすべてを思い出した。

この場面を見た事がある。あの時は画面の向こうの出来事だったから大して衝撃は感じなかったけれど、今はそれが現実として迫っていた。

気づけば王家の森と呼ばれる森の中で、あたしは怪物たちに襲われていた。よく覚えていないけど、恐怖で腰が抜けたのか、地面に座り込んでいる。

相手のなまぐさい息がかかる。不気味というかぶつちやけ醜悪な顔に……ぞつとした。

目が合った途端にわかったのだ。こいつらにとつてあたしは、ただの餌でしかないんだって。小ぶりで骨っぽそうだけど、食べるところはそれなりにある、都合のいい獲物なんだって。

逃げなくちゃ。一緒に来ていたはずの近衛兵は、どうして一人も助けに来てくれないの。

泣きそうだ。泣いて助けが来るなら、どんなにみつともなくても泣きたいくらい。

……でも、わかつてる。助けが来ない事なんて、だつて。

あたしは皆から嫌われていて、近衛兵たちにも見放されているから。

前世でプレイしていた乙女ゲーム「スタイルの花冠」の不細工な悪役。

そんなあたしがこうして怪物に襲われるルートはトゥルーエンドになるはずで、死んでも多少は可哀想だとプレイヤーに思ってもらえる。

ここであたしが死ぬから、ゲームのヒロインは本命の攻略対象である公爵様と仲を深めるのだ。豚の怪物がニタニタ笑みを浮かべて、大きな武器を振り下ろそうとする。

そこであたしは現実には立ち戻った。考えるよりも先に、逃げなくちゃいけない。だって、このままじゃ死んじゃうでしょうが！

必死に足を動かそうとするけど、全然動かない。焦りながら何度も「動け」と念じて、はっと思いつく。

あたしは……うん、このキャラクターは左足が不自由な設定だった。一度座り込むと、誰かに手を貸してもらわなければ立てない。

「ふ……」

声が震えた。現状に対する怒りが湧いてきたからだ。

なんでこんな目に遭わなきゃいけないわけ？

「ふざけんじゃないわよ!!」

叫んだ拍子に、あたしの左足がぴくりと動いた。でも、それ以上は動かない。

いい加減にしろ、と自分の足に対して悪態をつきそうになる。

立てないのなら、何か別の手段で逃げるしかない。

考える。いや、考える前に、本能で逃げるんだ。

目の前の怪物が武器を振り上げる。

もうためらっている場合じゃないって、あたしは覚悟を決めた。

体を反転させて、どうにか怪物の攻撃をよける。

重いドレスが足に絡んで、転がった拍子に敷やぶに突っ込みそうになった。

動かない片足が腹立たい。

豚の怪物たちはあたしをいたぶるように、よけられるギリギリの速度で武器……棍棒こんぼうとかを振り下ろしてくる。

それらを紙一重でかわしたけれど、棍棒が顔の横をかすめた。

冷や汗が流れる。危うく死ぬところだった。

鳥肌が立つくらい怖い。泣きたいけど、そんな事をしたら涙で何も見えなくなる。

誰かに助けてほしい。でも絶対に助けは来ない。

だってゲームの中でも、助けてくれる人はいなかった。

無我夢中で棍棒を、斧を、刀を避ける。

普段のあたしには絶対にできない。でも死にたくないから、必死で動き続けた。

これが前世だったら逃げられた。あたしは足が速くて、百メートルでは負けなشتたのだ。

でもこんな動かない足では、走って逃げるなんて無理。それどころか立つ事も歩く事もできない。

そうして必死でよけているうちに、一本の木のすぐそばまで来た。

これにつかまれば立てるかしら。立てば、何か変わるんじゃない。そんな思いで木にしがみつく。「動きなさいって言うてんでしょうが！」

自分の足に向かって怒鳴る。

苛立ち。焦り。いろいろぐちゃぐちゃになる感情。

でも立てば、起死回生のチャンスがあるかもしれない——そんな希望に縋って、動かせる方の足を使い、木につかまってなんとか立ち上がった。

ちらりと横を見れば、車椅子の残骸が転がっていた。一目見ただけで、どれだけ強い力で壊されたのがわかる。多分、棍棒で一撃だったんだわ。

——そうだ、あたしは車椅子を使っていたんだっけ。

ゲームでも、そういう設定だった。あたしは足が悪いから、健康なヒロインをうらやんでいた。次々と素敵な体験をするヒロインに嫉妬し、最終的には殺意を抱いたっけ。ヒロインを消してしまえば自分がその立場になれるかもしれないと考える、馬鹿な女の子の役だったのだ。

豚の化け物たちが、立ち上がったあたしを見て笑う。

ぞっとして、思わず腰が抜けそうになるけど、ここで座ったらまた転がって逃げるしかない。だからなんとか木にしがみついて、立ち続ける。

あえぐように息を吸う。目は涙でいっぱいだ。でも泣けない。泣いたら死ぬ。

涙目で豚の化け物を思い切り睨む。そしてもう一回息を吸った。

死にたくない。絶対に。ここがどんな世界であろうと、今のあたしにとっては現実なのだ。

だから——

「あたしは死ねないのよ！」

心の底から叫んだ。半分くらいは、自分に言い聞かせていたのかも知れない。

この体から、どうしてこんなに大きな声が出たのか、自分でもびつくりするほどだった。

「あんたたちの餌になって死ぬなんて、まっぴらごめんよ！」

啖呵を切り、足を引きずって駆け出そうとした。

だけども動かない左足が邪魔をして、派手に転び、そして地面に顔を強く打ちつけた。

「つ……」

すごく痛い。思わず額に当てた手に、赤い血がついた。打った拍子に切れたらしい。

やっぱりのこの世界は夢じゃない。間違いなく現実だ。

後ろで豚の怪物たちが、獲物を追いかけるために動き出す。

あいつらが本気になったら、あたしはあつという間に死ぬだろう。

でも足掻くの。だって生きたいから。

こんなに生きたいって思うの、生まれて初めてかもしれない。

もう一回立ち上がらなくちゃと思ってても、左足はなかなか言う事を聞かない。

なんとか立ち上がった時には、もう追いつかれていた。

一頭の豚の怪物が、あたしに向かって斧を振り下ろしてきた。

ものすごい速さのはずなのに、なぜか世界が遅く見える。

その時、茂みの方から何か銀色のものが飛んできた。今のあたしにはすべてがゆっくりと見えるのに、それだけが鋭く飛んできたのだ。

それは豚の怪物の腕を貫通して、立ち並ぶ木のうちの一本に突き刺さった。ふしゅ、って音がした。……一体なんの音？

「おおっと、動かねえ方がいいぜ」

誰かの声が出た。その声は笑っているようだった。

藪をかき分けて現れたのは、フードを深く被った男の人。その人が怪物に忠告する。

「俺の得物は飛び切りの切れ味なんだぜ？ 動くと——」

そこで斧を持つている豚の怪物が、標的を彼に変えて襲いかかった。

「逃げて!!」

あたしは思わず叫んだ。誰だか知らないけれど、無手に見えたからだ。

武器を持たずに怪物に挑むなんて自殺行為。それなのに、その人はやりと不敵に笑った。

「落っこちちまうぜ」

彼がそう言った瞬間、豚の怪物の両腕がぼろりと落ちた。

一拍遅れて、血しぶきがあたりを汚す。

何が起きたの？

呆気にとられるあたしの前で、豚の怪物は痛みを叫び、のたうち回っている。両腕を失ったのだから、当たり前だろう。

でも、なんでそうなったのかはわからない。唯一わかったのは、男の人の格が違うという事だけ。呆然としていた他の怪物たちは、我に返ると先を争いながら逃げ出した。

残されたのは、あたしと男の人と、両腕を失った怪物だけ。男の人はのたうち回る怪物を見やっただ後、落ちていた斧を拾う。

「見たくないなら、目を閉じな」

そう言われて、次に起きる事は大体予測できた。それでも、あたしは目を閉じなかった。

怪物が使っていた大斧が、持ち主の首に向かって振り下ろされる。

首を落とされて、豚の怪物は絶命した。

あたりが静かになると、男の人はわっか状の何かを木から引き抜いた。さっき飛んできた銀色のものは、あれだったのね。

「あの……」

ここでやっと声を出したあたしを、彼がちらりと見る。

「ああ、視にくいな」

そんな事を言いながらフードを脱いだ彼は、色黒で、髪も瞳も真っ黒だった。

左目を汚れた包帯で隠し、たくましい体を、下級市民が着るような服と鎧で包んでいる。歳の頃は……三十代後半か。

彫りの深い顔に髭を生やしたその人は、あたしを見て首をかしげた。

「あんた、よく吼える嬢ちゃんだな」



よく吼える嬢ちゃん。この人は、さっきのあたしの叫び声を聞いていたのかしら。
助けが来てくれてすごく嬉しいけど、想定外だわ。

そこではっとした。まずはお礼を言わなきゃ。

「助けてくれてありがとうございます」

あたしがお礼を言うと、彼はきよとんと目を丸くした。

「嬢ちゃんの啖呵たんかが気に入ったんだ、俺は。礼には及ばないな」

「でも、助けてくれたのは事実だわ」
そう言いながら彼を観察する。

うん。この人はゲームの攻略対象じゃない。髭ひげだらけのむさくるしい男なんて、あのゲームには登場しなかった。

——もしかして、あたしがゲームを変えてしまったのだろうか。

序盤で悪役が死ぬ事、それがトゥルーエンドを見るための重要なポイントだった。

妹のあたしを失った悲しみの中で、ヒロインは公爵様と愛を育はぐむのだ。

でも、そんなのどうでもいい。こうして助かったんだから。

「本当にありがとう」

あたしはもう一度お礼を言った。以前のあたしなら絶対に言わなかったはずなのに、前世を思い出したのと同時に性格も変わってしまったみたい。

「感謝してるのか」

「ええ」

「なら、俺のお願いを一つ叶えてもらえないかね？ お姫様」

「どうやら彼はあたしの身分を知っているようだ。その上で、どんな無理難題を吹っかけてくるつもりなのか。あたしが身構えると、彼は豪快に笑った。

「いんや、大した事じゃねえって。そんな構えないでくれよ」

「……お金なら、わたくしは持ってないわ」

「なんだ、お姫様ってのは貧乏なのか？」

「わたくしが個人的に使えるお金はないの。わたくしは家族にも大事にされていないから」

「へえ、お姫様はきれいなものにな」

「それはあなたが、お姉様を知らないから言えるのよ。わたくしのお姉様は三国一の美姫びきなの」
そう。このゲームのヒロインは末恐ろしいほどの美少女で、男なら誰もが骨抜きになるのだ。

誰でも彼でも惚れさせてんじゃないわよって、プレイ中何度も思ってしまったくらい。

「そんなことあどうでもいいや」

「そう言いながら、彼があたしの前にしゃがみ込む。

「俺をお仕えさせてもらえませんかね？」

「は？」

何を言ってるのか、一回聞いただけじゃわからなかった。

あたしに仕えるっていうの？ この人。お金なんてないって言ってるのに。

「わたくし、何も持ってないの。ご飯もお金も洋服も暖かい部屋も、なんにも与えられない」

「俺はあんたが気に入った。だから仕えたい。それだけだ」

だめ押しみたいに言われて、あたしは考えてみる。

確かに、味方が一人くらいいた方が、都合がいいかもしれない。もし本当にゲームの道筋が変わってしまったとしたら、何が起るかわからないからだ。

「……お父様に頼んでみるわ」

その言葉を聞いて、彼は満足げに笑った。

「その前に、名前を聞いてもいいかしら」

「名乗るほどの名前は持ってねえ」

「……じゃあ熊さんって呼ぶわよ」

そう口にした後、声に出して笑ってしまう。だって彼は熊そのものだった。大きくて色が黒くて、ごつくて髪がぼさぼさで。

「イリアスだ。熊はやめてくれ」

とっつても嫌そうな声で、彼——イリアスさんは言った。

「わかったわ、イリアス。さっそく頼んでもいい？」

「なんなりと」

「手を貸して。一人じゃうまく歩けないの」

「仰おほせのままに」

彼が貸してくれた手は大きくてかさかさしていて、おまけに傷痕だらけだった。でも嫌いじゃないわ、こういうの。

前世は日本っていう国の、どこにでもいる普通の女の子だった。本とゲームが好きで、人気のあるゲームは一通りやったと思う。

下に弟が三人いた。上の弟はスポーツマンで、熱血野郎。何が楽しいのか姉のあたしに柔道の技をかけてきては、お父さんに怒られてばかりだった。

真ん中の弟は歳の割に分別くさくて、頭のよくない兄を軽蔑してた。あたしの事も、多分そんなに好きではなかったんじゃないかしら。

末の弟は甘えっ子で、世渡り上手だったわね。

サラリーマンのお父さんと、パートに家事にと働きまくるお母さん。家族構成はそんなもの。

あたしの死因はなんだったかって？ 通り魔に襲われたのは覚えてるわ。何か所も刺されたから、多分それが原因で死んだと思う。

そしてここはやっぱり、前世のあたしが最後にプレイした乙女ゲームの中みたいだ。

森から出てきたあたしに蒼白な顔で駆け寄ってきた美少女を見て、推測は確信に変わる。

絹糸のように艶やかで、光り輝く白金の髪。触れるのが恐ろしいくらいきれいな白磁の肌と、煌めくエメラルドグリーンの瞳。

どれも見覚えがありすぎる。間違いなく「スタイルの花冠」のヒロイン、クリステイアーナ・デア

イアーヌ・ルラ・バスタアだ。

そして今日は……記憶が間違っただけなら、あたしたち双子の誕生日。ゲーム序盤のイベントである舞踏会が行われる日だ。

ゲームではあたしが死んでも舞踏会は開催された。外交上の理由で中止するわけにはいかなかったのか、それとも攻略対象たちとの出会いには欠かせなかったからか。

考えてもわからない。というか、ゲームのご都合主義に疑問を抱いてはいけけない。

とにかく、誕生日の舞踏会で物語は本格的に幕を開けるのだ。

前世を思い出すなら、もっと早く思い出したかった。

だってあたしはこの世界に生まれてから今日まで、超がつくほど嫌な悪役街道を突っ走ってきたのだから。

「バーティミス……？」

クリステイアーナ姫が震える声で言う。それも当然だろう。イリアスさんの腕を借り、足を引くするように立っているあたしが、幽霊よりも悲惨に見えるのは間違いない。

「生きていたのね……？ 無事でよかった……」

はらはらと流れる大粒の涙。詩人だったら真珠の涙と形容するんじゃないかしら。

そこで、近衛兵の一人が若干引きつった顔で問いかけてきた。

「ご無事で何よりです、殿下。そちらの男は……」

「あなたたちが見捨てたわたくしを助けてくださった人よ。彼に対する無礼は許さないわ」

あたしは近衛兵たちをじつと見据えて、そう言った。近衛兵たちは顔を青くしている。
でも――

「……あんなのがいきなり出てきたら逃げたくなる気持ちはわかるわ」

豚の怪物が突然現れたりしたら普通逃げるわ。それにあたしはゲームで嫌われキャラだったから、兵士たちが護衛につくのを嫌がったのもわかる。

でも、これだけははっきりさせないといけない。

「あなたたちは、お姉様をちゃんと守り通せた？」

「は……？」

怪訝けげんそうな顔をする彼らに、あたしは言う。

「お姉様を守るだけで手いっぱいだった、って事なんでしょう？　そういう事情なら、なかつた事にしてあげるわ」

できるだけ軽い調子で言った。今まで自分がしてきた事を振り返ると、近衛兵たちに文句は言えない。あたしはそれくらい最低だったから。

腕を貸してくれているイリアスさんの肩が震えている。必死で笑いをこらえているらしい。ちよつと、足を踏むわよ。

「本当ですか……？」

近衛兵たちが信じがたいものを見るような目でこつちを見ている。

「二言はないわ」

あたしがきつぱりと言いついたら、近衛兵たちはほつとした様子だった。

「早く城に帰りましょう」

そう言いながら、足を引きずって歩き出したあたしを、近衛兵の一人が慌てて止めに来た。

「二の姫様、馬にお乗りください！」

「馬になんて乗った事がないわ」

いつも輿こしか車椅子で移動していたから、乗馬なんてできない。だからあたしは隣にいる人を見上げた。

「イリアス、馬に乗れる？」

「一応は」

「じゃあ、あたしを乗せて」

「仰おほせのままに」

イリアスさんがあたしを軽々と持ち上げる。そして馬に横向きに座らせ、手綱たづなを握った。

近衛兵たちは物言いたげな目でイリアスさんを見た後、クリスティアーナ姫を馬に乗せる。

彼女はあたしを心配そうに見ていた。やっぱりヒロインは性格も美人なのね。

「ステイルの花冠」はちよつと変な乙女ゲームだった。

制作者の趣味で、リアリティのなさなるものを追求したらしく、ヒロインは完全なるチートキャラ。性格がよくて頭もよくて、理想を詰め込みすぎたような美少女だったのだ。

プレイヤーたちは大抵、こんな女がいるわけないってツツコミを入れる。でもそんな彼女が恋をして、ライバルに嫉妬したり相手の発言に一喜一憂したりと、女の子らしい悩みを持つようになる。すると、チートでハイスペックでも同じ人間なんだって、プレイヤーたちはヒロインに好感を抱くのだ。

攻略対象たちはそろいもそろって美形だった。でもそれぞれ一癖も二癖もあって、いろいろ抱え込んでちゃつてる。そんな彼らがヒロインと出会って恋をして、抱え込んでいたものから自由になり成長したりするのだ。

世界観的には、魔法要素ありの近世ヨーロッパ風ファンタジーって感じだった。

服装も十八世紀のヨーロッパ風。フランス革命の少し前くらいの感じかしら。女性はスカート部分が大きく膨らんだドレス、男性は上下そろいのスーツみたいなを着ている。

さて、悪役のあたしはどんなキャラだったか。馬に乗りながら自分の事を詳しく思い返してみた。

えっと……今のあたしは、名前が非常に長つたらしい。

バーティミウス・アリアノーラ・ルラ・バスチア。通称二の姫。この二の姫ってのは二番目のお姫様という意味だ。

あたしを一言で表すなら、出来損ないのお姫様。子供の頃から足が悪くて、踊りなんて一つもできない。音痴だから歌も下手。一応刺繍はできるけど、出来上がったものを見ても何だかわからないと言われる。

まともにできるものがほとんどないあたしにも、一個だけ得意なものがある。古代クレセリア文字の解読だ。

お姫様っていうのは勉強よりも花嫁修業をさせられるものなだけけど、古典を学ぶのは女の子らしいからとかそういう理由で、いろんな古典を読まされてきた。そこから深みにはまって古代クレセリア文字の解読ができるようになったのだ。

逆に言えばそれしかないから、なんでもできるクリステイアーナ姫がうらやましかった。そしてその気持ちがだんだん憎悪とか嫌悪とか、それ以上のひどい感情に発展してしまったらしい。

あたしは足が悪い事もあって、幽閉に近い生活をさせられていた。対して姉姫は自由に外に出させてもらっていたから、ひどい感情に余計に拍車がかかったのである。

歪んだ性格のせいで、あたしには友達なんて一人もいなくて、当然心を許せる相手もない。そんな出来損ないがゲーム中でなんの役割をするかというと、完全なる悪役だ。

クリステイアーナ姫が優しいのをいい事に、バーティミウスは女官を使って攻略対象との恋路を邪魔する。言う事を聞かない女官はどんどんクビにしていた。

職を失うのを恐れて、女官たちは姉姫に嫌がらせをする。お茶会の招待状をこっそり破棄するか、姉姫あての手紙を改竄するとか。ドレスに刃物を仕込んだり、姉姫を言葉巧みに誘って危険な裏町に連れていったりした事もあった。

でも決して尻尾は出さないあたり、女官たちは優秀と言える。そのおかげでクリステイアーナ姫から見れば、バーティミウスは決して優秀ではないけど素直で姉を慕ってくれている妹。

しかしその実態はクリステイアーナ姫が攻略対象と仲良くならないように……幸せにならないようにと暗躍する妹だったのだ。

バーティミウス自身が行った嫌がらせは、主に情報操作だったわね。クリステイアーナ姫はたくさん男をもてあそぶ鼻持ちならない悪い女だという、悪意ある情報を流しまくった。

裏稼業の人を雇って、クリステイアーナ姫を暗殺しようとした事もある。攻略対象に邪魔されて失敗したにもかかわらず、懲りずに何回もやったのだ。

姉姫を心配するふりをして攻略対象に近づき、泣き落としをしたり脅したり、挙句の果てには色仕掛けまでしたり……

情報操作はまだしも、不自由な体を使って色仕掛けなんてよくできるわよね。

そんな馬鹿をしてしまうくらい、クリステイアーナ姫が幸せになるのが許せなかったのかしら。

でも悪事はバレるのだ。父である国王にバレた結果、バーティミウスは王族の面汚しとして断罪される。

処分の仕方はいろいろあったけど、一番まじだったのは、とんでもない僻地にある離宮に幽閉されるというものだった。

他はもつとひどい。問答無用で処刑されるとか、重罪人用の牢獄で一生を過ごすとかいうのもあった。最下層の地下牢には灯りなんてほとんどなかったし、ろくな食べ物ももらえないし。衛生状態も最悪で、すぐに感染病にかかって三日で死んだわ。

修道院に入れられるっていうのもあったっけ。これもまじだと思いかもしれないけれど、この修

道院がとんでもないところで、バーティミウスを生贄として神に捧げるのだ。

確か恨みがたまった女官たちの手で奴隷として売り飛ばされて、男たちの慰み者になるというパターンもあった気がするわ。

思い出せるのはこれくらいだけど、どれもひどいのは間違いない。

プレイヤードン引きな罰を受けるのが、出来損ないで嫉妬深い妹姫……バーティミウスの最期だからゲームの序盤で死ぬっていうルートは、ある意味バーティミウスの救済ルートでもある。

だって悪い事をする前に死ぬるから。ヒロインの邪魔などしない可哀想な被害者で終わられるからだ。

ここまで思い出したところで、あたしは今後の方向性を決める。

よし、クリステイアーナ姫への嫌がらせはやめよう。そういうの嫌いだし。

嫌がらせをしなければ……バッドエンドは回避できるわよね。

別に悪役がいなくなつて、クリステイアーナ姫は勝手にイケメンたちと恋愛するでしょう。

ここがゲームの世界なら、物事をゲーム通りに進めようとする強制力が働いてもおかしくない。

でも、死ぬはずだったあたしが生きているという事は、その強制力も大したものじゃないだろう。うん、いけそうな気がしてきた。

馬でゆっくり帰ったあたしは、改めて見たお城の大きさに衝撃を受けた。前世の世界にあった夢の国のお城なんかとは比べものにならない。

巨大な壁に囲まれた白垂のお城は真珠城と呼ばれている。その名前がぴったりな姿だ。

城壁の中には建物がいくつも立っていた。特に目立つのは見るからに新しそうな白い建物。あれ何だったかしら。

お城の門をくぐる時、兵士の人たちがイリアスさんを見て怪訝そうな顔をしていた。連れてきた本人が言うのも変だけど、場違いなものね。

そんな兵士たちの視線をイリアスさんは気にしていない。だからあたしも気にしない事にして、背筋を伸ばして周りを観察する。

よく見たら建物同士は渡り廊下や石畳の通路で繋がっていた。石畳の通路はそれなりに広くて、その周りの芝生もきれいに整っている。

南の方には大きな庭園があったはずだ。かすかに花の香りがする。

今あたしたちが通っているのは、城の表側だ。少し進むと厩舎が見えて、馬のいななきが聞こえてくる。

「厩舎は全部でいくつあるのかしら？」

「二十ほどです」

あたしの疑問に、近衛兵が答えてくれた。厩舎が二十もあるなんてさすがはお城ね。

「へえ、多いのね」

「騎士や兵士の乗る馬は隊ごとに分かれていますから。ちなみにここは王族専用の厩舎となっております」

詳しい説明をありがとう、と心の中で感謝しておく。

この厩舎に、あたしやクリスティアーナ姫が乗っている馬を戻すという。あたしはイリアスさんに抱えてもらって馬から降りた。

馬は早くもイリアスさんに懐いたらしく、鼻をこすりつけて甘えている。

彼も悪い気はしないようで、目を細めて撫でていた。

「イリアス。そうやっていつまでも馬を撫でていては、あなたをお父様に紹介できないわ」

「ああ、すいませんね」

そう言いつつ、イリアスさんは馬を撫で続けている。

「腕を貸してちょうだい。私は人につかまらなくては歩けないの」

もう一度声をかけると、イリアスさんがやっと馬から手を放した。

「どうぞ、お姫様」

あたしに腕を貸す彼に、周りは微妙な眼差しを向けている。第二王女が連れてきたのは一体何者なのか。そう言いたげな眼差しだ。

でもそれを気にしていたら歩けない。

神経が太くてよかったわ。

イリアスさんを杖代わりにして、正面の扉から城の中に入る。中は割と明るくて、壁には外側と同じような白い石が使われていた。生まれてからずっとここで暮らしてきたはずなのに、やけにきれいで立派に見える。

隣ではイリアスさんがぼかんと口を開けて、あちこち見回していた。

王女たちが帰ってきたという知らせを受けたのか、一人の女官が駆け寄ってくる。

「二の姫様、なんというお姿なのでしょう」

彼女は眉をひそめてそう言った。

まあ、今のあたしって草まみれだし土まみれだし、結構すごい姿だものね。

「ああ、ちょっと豚の化け物……いえ、多分オークに襲われたの」

「オーク!?」

女官は卒倒しそうなほど青ざめていた。

「王家の森にそんな怪物が出るなんて、聞いた事がありません」

「でも、実際にいたのだから仕方ないでしょ。今日は夜会があるのよね? それまでに見られる格

好になりたいわ」

あたしはできるだけ偉そうな口調で言った。すっごく疲れる。

でも、今までのあたしはそういう風にしゃべっていたんだし、いきなり性格が変わったら変だ

ろう。

今のあたしの性格は徐々に出していけばいい。

「わかりました。すぐに入浴とお着替えの準備をいたします」

「それと、この方はわたくしの命の恩人なの。彼にも湯殿ゆどのを使わせて、今よりまともな格好にさせ

てちょうだい」

隣のイリアスさんを示しながら命じる。

だってすごいのは、汚れ方が。怪物の首を落とした時の返り血までついているし、おまけに不快

極まらない悪臭もする。近くにいると鼻が麻痺まひしてくるほどだ。

「……へ?」

女官の人は妙な顔をして固まる。

「早くして」

あたしが機嫌の悪そうな声で言うと、彼女は慌ててイリアスさんをどこかへ連れていった。

「姫様、こちらです」

別の女官が来て、あたしを城の奥に案内する。壁伝いに歩くあたしを見て、彼女は眉をひそめて

いた。でも絶対に手は貸してくれない。

そしてどうにか、王室専用の湯殿に到着する。

そこにいた女官たちに手伝ってもらいながら、あたしは汚れ切ったドレスを脱いだ。

一人じゃ脱ぎ着できない服とか本当どうなってるの。特権階級の衣装ってこれだから嫌。

「誰も入ってこないで。一人になりたいの」

そう言って、湯殿に入ってこようとした女官たちを制する。

彼女たちは顔を見合わせたけど、こんな気まぐれは慣れっこだからか、すぐに顔いて鈴を渡して

きた。

「ご用がありましたら、お呼びくださいませ」

「わかったわ。ありがとう」

さらっと何気なくお礼を言う。まるで普段からそう言っているかのように。

女官の人たちはほんの少しだけ固まったけれど、恭しくお辞儀をして下がった。

壁の手すりを使って湯殿の中に入ると大きな浴槽があった。昔のヨーロッパじゃお風呂は悪徳だったという話もあるけど、この世界はそうじゃないみたいね。

お風呂に伸び伸びと浸かって、自分の手足を確認する。見た感じ、ひどい怪我はない。ドレスの丈や袖が長かったから、そういうのが手足を守ってくれたのだろう。

ただ、左足には妙な痣があった。こんなの前からあったかしら？ それは普通に生活してたらつかないだろう大きな痣で、足首から膝上まで這い回るようになっている。

気味が悪い痣だと思いつつ、湯船の中で左足をマッサージして、感覚があるか確かめた。

ちゃんと感覚はある。ならばと思つて足の指を動かしてみた。動かないだろうと思つたけれど、意外にも動いた。ただ、動かし慣れていないみたいにぎこちない。

試しに膝を曲げてみたら、ゆっくりだけれど普通に曲げ伸ばしできた。

足首も回せるし、長年歩かなかつたから歩けなくなつただけなんじゃないかしら。毎日少しずつ練習すれば、遅くとも歩けるようになりそうだ。

よし、やってみよう。目指すは、杖をつかなくても自由に歩く事だ。

そう思いつつ湯船から出て、いい香りのする石鹸で顔を洗う。そして鏡を見たら、額のあたりにうつすらと切り傷があった。

地面に顔を打ちつけた時の傷かしら。額の傷つて、見た目の割に出血が多いのよね。でも今は血は止まつてるし、これなら髪の毛で隠せる。

あたしは髪と体を洗つてすっきりしてから、湯船にもう一回浸かった。

湯殿の外に出たら、さっきの女官たちが待機していた。あたしは思わず悲鳴を上げそうになる。

前世の記憶を取り戻したせいかわ、裸を見られるのは抵抗があった。でも、どうにか悲鳴を呑み込む。

女官の人たちはあつという間にあたしを取り囲んで、手際よく服を着付けていく。

「……すごーく」

あたしは小さく呟いた。一人の女官が怪訝そうにこちらを見ただけで、あたしは素知らぬ顔をする。

そして着替え終わってから、本当に何気ない感じで言った。

「ありがとう」

これだけで、女官の人たちが驚愕していた。以前のあたしって、どれだけ横柄なやつだったのよ。我ながらショックだわ。

「イリアスの方も終わっているかしら？」

いち早く我に返つた女官が、イリアスさんは身支度を整えて湯殿の前の部屋にいるって教えてくれた。

「そう。……ねえ、杖ちょうだい。なんでもいいわ」

「二の姫様、車椅子がありますよ」

「いい。歩いていくわ」

半ば人格が入れ替わってしまったような今のあたしに、車椅子がうまく使えるとは思えない。だから歩いていくと主張したら、女官の人たちが杖を持ってきてくれた。

意外と素朴な杖だったので、ほっとする。金銀宝石でできた杖を渡されるんじゃないかと思っていたから。

杖を支えにイリアスさんのいる部屋まで歩いていったら、彼は退屈を紛らわすみたいに壁の絵を眺めていた。

「……額の傷の手当はしてもらったのかい、お姫様」

こちらを見たイリアスさんが問いかけてくる。

「ああ、これくらいの切り傷なんて、どうって事ないわ」

後ろで息を呑む音がして、女官の一人が慌てた顔で聞いてきた。

「二の姫様、お怪我をなさったのですか!？」

「ほんの軽い怪我よ。……でも塗り薬とかあったらもらえるかしら」

「ただちに持ってまいります!」

彼女はそう言っ、お尻に火がついたみたいに猛然と走っていった。

すぐさま女官が戻ってきた。その手には塗り薬と当て布がある。

あたしは薬草の香りがする塗り薬を傷に塗られて、そこに薄い布を貼られた。

「こんな大げさにしなくていいのに」

ほっとけば治るでしょ、これくらい。

そう思ったけれど、記憶を探ってみたら、あたしはこれくらいの怪我もした事がなかった。気まぐれで残酷な二の姫様の機嫌を損ねないように、お城の皆は必死なのである。

とりあえず傷の手当てが終わったところで、あたしは杖を片手に言った。

「お父様のところへ連れて行ってちょうだい」

案内された部屋に入ると、広くて豪華な部屋の奥には立派な玉座があった。そこには歳の割にずいぶん若々しいお父様が座っている。

その近くには見覚えのある兵士がいた。多分、今日森で起きた出来事をお父様に報告していたんだらう。

「大変だったね、娘や」

お父様が言った。あたしは簡単に帰城の挨拶をした後、隣にいる大きな手を手で示す。

「お父様。こちらがわたくしの窮地を救ってくださった方です」

そうイリアスさんを紹介すると、彼は怖気づく事もなく淡々と頭を下げた。

「この方を、わたくしの専属護衛にしてもよろしいでしょうか。とてもお強いんです」

そう言いつつ、お願いを聞いてもらえるかしらと不安になる。こんな場面はゲームにはなかったから、お父様がどう出るかは未知数だ。

「……ああ、わかった」

その秀麗な顔をあたしとイリアスさんに向けてから、お父様は言った。あまりにも呆気なく許可が出たから、あたしは拍子抜けしてしまふ。

「ちょうどお前に新しい護衛をつけようと思っていたんだよ、かわいい娘や」

命の恩人だというなら信用しても大丈夫だろうとお父様は頷いた。必要な事務手続きは、宰相様とお父様がやってくれるらしい。

あたしは頭を下げてお礼を言い、お父様たちにすべてを任せて部屋を出た。

イリアスさんを引き連れてお城の中を歩くと、誰もがあたしを見ていた。多分あまりにも王宮にふさわしくない、粗野なイリアスさんを連れているからだろう。これだから出来損ないの王女は、とでも思っているのかもしれない。

人によっては扇で顔を隠したりして、ヒソヒソと囁き合っている。

勝手に言ったらば？ 別に気にならないわ。

だって、あたしは自分の足で立つ努力をしているだけ。陰口を言われるほどやましい事はしてない。

なんて思いつつ自室に戻った。自室の前では女官たちが待っていて、あたしに頭を下げる。

入り口の扉を開けると、あたしはそれを勢いよく閉めた。理解不能な光景が目の前に広がっていたからだ。

「どうしました？」

イリアスさんが聞いてくる。あたしはもう一回、恐る恐る扉を開けた。

自分の部屋だし見慣れているはずなのに、前世を思い出した今は豪華絢爛という言葉を感じてしまう。

あたしは足が悪くてベッドにばかりいたから、大きな寝台の周りにいろいろな物が置かれていた。例えば好きな古典の解説書とか、お気に入りのオルゴールとか。

そして部屋の隅には、一度も使った事のない楽器が置かれている。たくさんのパイプが伸びているピアノみたいな楽器だ。

名前が知らない。というか興味がなさすぎて覚えていない。どうしてその楽器があたしの部屋にあるのかすら覚えていないくらい前からあるのだ。

あたしの後ろから部屋を覗き込んだイリアスさんが、ぼそつと呟いた。

「贅沢な部屋だ」

「そうね、確かに贅沢だと思うわ。でも王女だもの、これくらいの部屋は当然だわ」

そう言いつつ、こんなに豪華な部屋だったわけ？ とも思う。多分、前世の記憶や思考回路が、部屋に対する認識を変えてしまったからだろう。

心が変われば目に映る世界だって違うものになるのだ。

あたしがイリアスさんと一緒に部屋に入るとすぐ、女官たちが次々と入ってきた。

「二の姫様、今日の夜会のために、ご準備をしていただきます」
あたしはごくりとつばを呑み込んだ。

いよいよゲームの第一ステージの幕開けだ。

ここでヒロインのクリステイアーナ姫と攻略対象のうちの誰かが接触する。悪役のあたしにも何が起るかわからないし、気合を入れなくちゃ。平穩な未来のために。

舞踏会用のドレスを着るのって、こんなに大変なんだ……

あたしは内心げんなりしていた。本で読んでイメージしていたのと実際に着るのには、ものすごい落差がある。息が詰まるほどきつかった。

何しろこの世界にはクリノリンなんてものはないから、ペチコートを十枚以上も重ねるのだ。布の重さって馬鹿にしちゃいけない。これじゃ絶対に機敏きびんになんて動けないだろう。

鏡の中には流行のフリルがあしらわれ、小さな宝石を縫いつけてある豪華極まりないドレスを着たあたしがいた。いくら着飾って化粧をしても決してヒロインのようにはなれない、地味な顔立ちの女の子。

ヒロインである姉姫は白金はっしきんの髪と緑柱石りょくちゅうせきのような瞳を持っている。しかし妹であるあたしの髪は燃え盛る炎みたいな毒々しい赤色をしていて、目の色は猛毒のような水銀色だった。

常に人を睨にらみ据すえているような目つきめつきの悪さは、完璧に悪役の顔立ち。肌は蠟ろうみたいに白くて不健康そうだし、口紅の塗られていない唇は青ざめている。

背丈は低く、いくら背筋を伸ばしたって「すらりとした」という形容詞は似合わない。

どこをどう見ても魅力的じゃなかった。きっとゲームの制作者たちは、あたしの見た目を不気味にする事に情熱を注いでいたのだろう。

あたしはその場で一回転してみた。バランスを崩してよろけた体を、いつの間にか近くちかくにいたイリアスさんが支えてくれる。

「危ねえな」

「ありがとう」

そこで扉が叩かれて、あたしを大広間まで連れていく役目を任されている女官長が姿を見せた。

ふくよかな中年の女官長は、確かスミレさんという名前だ。

「二の姫様、ご用意は整いましたか？」

「いよいよだ。」

あたしがイリアスさんの腕につかまった途端、女官たちが渋い顔になる。

「……二の姫様。未婚の姫君が、どこの誰ともわからない男性に、軽々しくつかまつたりするものではないですね」

スミレさんが注意してきた。

さすが、長年仕えてきて王家に信頼されているだけあって、気難しい王女にだって注意できるのね。でも、あたしは譲らない。

「だって楽だわ。歩く時、彼が支えになってくれるの」

本当に、杖よりずっと楽なのだ。体重をかけてもびくともしないし、歩幅もあたしに合わせてくれる。歩く速度だって気遣ってくれるから、つい助けてほしくなってしまうのだ。

「そのような事をおっしゃらないでくださいませ。車椅子をご用意してあるのですから」

あたしの我儘^{わがまま}をたしなめるように、スミレさんは言った。

「乗らないわ、すぐくわらずらわしいもの」

今のあたしが車椅子を使つたところで、横転して怪我をするのはわかり切っている。いくらのろくつても歩いた方がまし。それなのに、スミレさんは首を横に振った。

「だからと言って、未婚の女性が家族以外の殿方につかまって歩くのは、はしたないですよ」

「あら。という事は、舞踏会に出る未婚女性は皆はしたないのね」

そう言い返せば、スミレさんが溜息を吐き出した。

「……仕方ありませんね。くれぐれも王妃様が卒倒なさらないようにお気をつけあそばせ」

「大丈夫よ、目立たないように隅^{すみ}にいるから」

隅にいれば、クリステイアーナ姫の恋路^{こいじ}の邪魔にもならないはずだ。

さて、気合を入れて空気にならなくちゃ。

会場の大広間に向かつて歩いてみると、前を歩く女官があたしたちをちらちらと何度も見てきた。

「あなたもわかっているんだろうに」

そんな声が聞こえてきたから横を見たら、隣の大きな人があたしを見下ろしていた。なんだか悪童^{あくどう}みたいな、いたずらっぽい目をしている。

「あら、何を？」

「俺なんぞを社交界に連れ出したら、あなたの立ち位置が危ういだろう。俺につかまって歩くのが

そんなに楽なのかい」

イリアスさんは呆れたように笑った。あたしもつい笑ってしまう。

「あはは、言われてみればそうかも知れないわ。あなたを連れていったらわたくしの評判が悪くなるでしょうし、いい事なんて何一つないわね。……でも困ったわ。あなたがいると思って、杖は部屋に置きっぱなしにしてきたの」

評判が下がるのは困るけれど、杖がないのと言い訳にして押し通そうと思った。それに見知らぬ男につかまっていようが、「バーティミウスなら仕方ない」と思われて終わりだろう。王族の女性として非常識な行動なのは間違いないけど、数ある悪評を一つ増やすだけだ。

それなのに、イリアスさんがさりげなく取り出したのは……部屋に置いてきたはずの杖だった。

「杖つてのはこれかい？」

あたしは目を丸くした後、自然と笑みを浮かべる。

頼んでもないのにあたしがしてほしい事をやってくれる人なんて、今まで一人もいなかった。

「あなた最高」

思わず抱き着くと、イリアスさんはやりと笑った。

悪どい笑顔ね。でも好きだわ、そういう顔。人間くさくて。

「どうぞ行ってください、お姫様。俺は陰から覗^{のぞ}いてますよ」

彼が茶目っ気のある顔であたしに言うから、妙な自信が湧いてくる。あたしは笑って、杖を片手に背筋を伸ばした。

今から始まる舞踏会で、ゲームの恋愛模様が幕を開ける。あたしがまだ生きているという事は、トウルーエンドにはならないかもしれない。

けど二番目や三番目のルートでも、クリステイアーナ姫は舞踏会でどきどきなトキメキ体験をするはず。うまくいくといいなと思った。

あたしは自分の意思でゲームをねじ曲げたわけだけど、ヒロインであるクリステイアーナ姫の幸せは祈りたい。

実は前世でも、ヒロインが結構好きだったの。

確かに他の人が言っていたように、完璧すぎてありえない女の子だと思うわ。それでも、意地悪な妹を頑張って庇^{かば}おうとしていた姿勢は尊敬できた。だって嫌われ者をフォロワーするのは大変なもの。

「準備はよろしいでしょうか」

大広間に着いたところで、女官長のスミレさんが言った。イリアスさんから離れたあたしを見て、周りの皆がほっとしていた。

先に扉の前で待っていたクリステイアーナ姫があたしに話しかけてくる。

「緊張してる？ バーティミス。わたくし、どきどきして……」

クリステイアーナ姫は胸に手を当てて、緊張を隠しきれない様子だ。初めての夜会だし、自分たちの誕生日のお祝いとくれば緊張しないわけがない。

「お姉様なら大丈夫ですよ。胸を張ってください」

そう言いつつあたしも手汗がやばい。

もうすぐ正面の扉が開き、たくさんのお客が集まっている場に、あたしたちはゆったりと登場するのだ。

……完全にさらし者じゃないかしら。

まあ、ヒロインが皆に注目されるのはわかるわ。

事実、目の前のクリステイアーナ姫はともきれいだ。萌黄色^{もえぎいろ}が下にいくにつれてだんだん白藍^{しろあらい}に変わっていく優美なドレスを着ている。裾^{すそ}の蔓草^{つるくさ}模様は濃い緑の宝石で形作られていて、見るからに着る人を選ぶデザインだ。

あたしなんか着たら、ドレスに負けてしまうだろう。

髪の毛も、夜会にふさわしい華やかな流行の髪型にしていた。結び上げた髪につけられた緑の髪飾りがきらきらと揺れている。

「お姉様は堂々としていればいいんです」

あたしがそう言って笑いかけたら、この世で一番麗しいお姫様はぎこちなく微笑んだ。ぎこちなくなつて、本当に美人である。

そんな彼女が、背筋を伸ばして瞼^{まぶた}を一回閉じた。それから微笑んでゆっくりと目を開ける。

もう、そこにはさつきまでの緊張している乙女はいなかった。

「クリステイアーナ・ディアーナ・ルラ・バスチア殿下、バーティミス・アリアノール・ルラ・バスチア殿下の、おなーりー！」

目の前の扉が徐々に開かれる。

王女らしく気品に満ちあふれた笑みを湛えたクリステイアーナ姫が、あたしより先に前へと進み出た。

「行きましよう、パーティミウス」

あたしも覚悟を決めて大きく息を吐き出す。

今から、乙女ゲーム「ステイルの花冠」の本編が幕を開ける。

あたしはヒロインの邪魔をする、嫌われ者の双子の妹。

…死にたくないし、牢獄にも入りたくない。修道院で一生を終えるのも嫌だし、島流しも遠慮したかった。

だからそういうルートに進むフラグは全部へし折るつもりだけど、それ以外でヒロインの邪魔はしない。前世で好きだった登場人物の幸せくらい、祈ったっていいでしょう。

それに考えようによっては、ゲームの登場人物たちの恋愛模様を間近で見られるのだ。そんな役得他にあるかしら。いいえ、ないわ。あたしがこの世界に転生したのも何かの縁なのよ。きつと意味があるはず。

そう思いながら、クリステイアーナ姫の後について歩き出す。杖の音をこつこつと響かせて大広間の中へ入ると、それはもうきれいな世界が広がっていた。

天井に描かれているのは宗教画だろうか。中国の龍みたいな生き物と、西洋のひれのある竜みたいな生き物が噛みつき合っている。その周りにいろんな人間たちが集まっているさまが描かれていた。

床は色とりどりの大理石が、複雑な幾何学模様を作り上げている。まるで大きなキルティングみたいだった。

真紅の絨毯の上をゆつくりと進むクリステイアーナ姫。その女神みみたいな姿を見て、称賛の声があちこちから上がっていた。

「なんと美しい……」

「王妃様もお美しいが、一の姫はそれ以上ですね」

「この世のものとは思えない」

「世界中から光が集まっているようだよ」

うん、べた褒めしたくなるのもわかる。それくらいきれいだよ、あたしも思ってるから。

それに引きかえ、あたしは完全に無視されている。周りの人たちが腹の中で何を考えているかは知らないけど、どうせろくな事じゃない。

この十五年間の記憶を顧みれば、あたしはものすごい嫌な王女様だったから。

そんな事を思いつつ、クリステイアーナ姫の二歩後ろを歩く。杖の先が大理石を叩くたびに、無機質な音が大広間に響いた。

やがてお父様とお母様の前に着いた。お姉様が貴族の人たちの方に向き直るのに合わせて、あたしも向き直る。

お姉様は優雅に一礼をして、誕生日の挨拶をした。これは毎年恒例となっている。ただ一つ違うのは、今年はあたしたち二人の社交界デビューだという事。

あたしも挨拶しようとしたら、途端に貴族たちが姦しくしゃべり出した。

これがヒロインとの待遇の違いなのか……ものすごい差がある。姉妹でこれだけ差をつけられたら、グレずに成長できる気がしない。もしゲームのパーティミウスも幼少期からこんな感じだったのなら、ひねくれるしかなかったんじゃないだろうか。

前世の記憶が戻って本当によかったなんて思いながら、おしゃべりな貴族たちを眺めていると、お父様が咳払いをした。

会場がしんと静まった中、お父様が言う。

「今日は私のかわいい娘たちのために集まってくれて、本当にありがとう。どうか夢のような時間を楽しんでくれ」

その言葉をきっかけにして、音楽が鳴り始める。ダンスのための音楽だ。

足が悪くて踊れないあたしにはまったく関係ない音楽を聞いて、つい笑い出しそうになる。だって音楽が始まった途端、男の人たちがクリステイアーナ姫にわっと群がったからだ。

彼女の最初の相手になるために、互いを牽制し合っている。

貴族だから大声で罵り合ったりはしない。もみ合いの喧嘩にもならない。ただ長々としゃべって、相手の邪魔をしているのだ。

あたしは近くの椅子に座って、クリステイアーナ姫がどの攻略対象とダンスを踊るのかを、チェックする事にした。

「スティルの花冠」では、一番初めに踊った相手が格段に落としやすくなる。誰と踊るか見ていれ

ば、どのルートをとるのか大体想像がつくってわけ。
そんな事を考えているうちに、クリステイアーナ姫の相手が決まったらしい。

あの髪と目の色は……公爵様だ。

シュヴァンシュタイン公爵。彼は銀の髪と透き通るような青い目をしていて、歳は二十代前半。

白地に青の差し色が入った夜会服がとっても似合う。物腰も優雅で、まさに女の子の誰もが憧れる王子様って感じのキャラクターだ。

ゲームでは一番わかりやすく攻略しやすいキャラだから、あたしも一番初めにクリアしたっけ。ちなみに、パーティミウスは彼を知っていたけど、彼はパーティミウスなんて聞いた事すらないという設定だった。無論、あたしもこの夜会で初めて接触する。貴族と接触する機会というものが、これまでほとんどなかったからだ。

あれ？ 公爵様がヒロインと踊るのって、パーティミウスが序盤で死んだ場合だけじゃなかったかしら？ 妹を失くして悲しむ王女様を公爵様が励まして、距離を縮めていくんだっただけは。何を隠そう、彼も弟を不慮の事故で亡くしているのだ。

その公爵様が、美しいクリステイアーナ姫とダンスをしている。

しかし妖精みたいに踊るのね、クリステイアーナ姫って。ひらひらふわふわと舞うような動きは、なめらかで優雅でとっても気品がある。

あれに勝てる女子がいたらお目にかかりたい。いや、そんな女子はいないって断言できる。

見てるだけで目の保養になるわ。やっぱり前世でもお気に入りキャラクタだったからかしら。

どうしても、嫉妬とかの悪い感情が湧いてこない。

……もっと早く前世を思い出せばよかったのに。そうすれば七歳の時、クリステイアーナ姫に向かつてジュースの入ったグラスを投げつけたりしなかったはず。

思い出せるだけでも、彼女に対して本当にひどい事をしてきた。地面に穴を掘って埋まりたいくらいだわ。

ここで改めて実感したのだけれど、あたしの中には二つの記憶があるらしい。バーティミスとしてこの世界で生きてきた記憶と、今のあたしの人格を形成する前世の日本人の記憶。

その二つは決して混ざらない。でもどちらもあたしの記憶という、少し変な感覚だ。

そこで、ふと目の前に人が立っている事に気づいた。

笑顔を作って顔を上げたあたしは、どうしてあなたがそこに立っているのよとツッコみたくなる。さつきまでクリステイアーナ姫と踊っていたはずの、公爵様がそこにいた。

「シ、シユヴァンシュタイン公爵様……」

あたしが裏返りそうな声で言うと、彼はにこりと微笑む。まさに貴公子の鑑かたみといった感じの、優美な微笑みだった。

「王女殿下に名前を知っていただけでしたとは、光栄です」

「あなたの噂うわさはよく聞くわ」

「おや。恥ずかしい噂でなければいいのですが」

彼はあたしと話をするつもりらしい。一体なぜだろう。あなたの相手役はあっちで……あ、踊ってる。

気づけばクリステイアーナ姫は別の男性と踊っていた。今度の相手は侯爵令息だ。

栗色の髪に、健康的な象牙色くろげいしよの肌をしたその人は、計ったように正確なステップを踏んでいて、内面の几帳面さがにじみ出していた。彼もまた、攻略対象の一人のほずである。

クリステイアーナ姫って、今回は誰と結ばれるんだろう……気にしても仕方ない事かもしれないけど、気になった。でも、いつまでも見ているわけにはいかない。

目の前にいる公爵様を、無視する事はできないからだ。

「剣がともお上手だと聞いていますわ。近衛兵このえへいが軒並み倒されてしまうとか」

あたしがあたりさわりのない事を言うと、公爵様は微笑んだまま答えた。

「そんなに腕の立つ人間ではありませんよ。まだまだ修業が必要な身の上です」

「ご謙遜けんそんを」

あたしは貼りつけたような笑顔で応対する。

公爵様があたしと親しくして、一体何になるというのか。あたしは彼とどうこうなりたいとは思わないし、彼もクリステイアーナ姫に恋をしているはずなのに。

幼い頃から、公爵様は彼女の遊び相手をしていた。その中で恋心が芽生えたというのがゲームでの設定だった。それを彼は、この舞踏会で自覚するのだ。

「あなたの事は覚えていますよ」

不意に公爵様がそんな事を言ったので、あたしは目を丸くする。
「わたくしを？」

「ええ。私がディア……失礼、クリスティアーナ姫と遊んでいると、いつもじっと見ていたでしょう？」

ああ、そういう事か。確かにそんな事もあったかもしれない。よくクリスティアーナ姫が外で遊ぶさまを窓から見ていた。公爵様が視線に敏感だったら、気づくかもしれない。

子供の頃から足が悪かったあたしは外に出してもらえなくて、庭で遊ぶ二人を覗んでいた。うらやましくてたまらなかったのだ。

「懐かしい思い出ですわ」

ここでもあたりさわりのない返事をする。だって、それ以外にどうしろって言うの。

皮肉の一つでも口にしてみるって言うなら、それは自虐じじやくにしかないから却下。

「ええ。……彼女のそばにいられた、懐かしい思い出です」

そう言いながら、公爵様は懐かしそうな目をしていた。いとおいしいという感情が透けて見えて、思わずどきどきとする。

やっぱりシュヴァンシュタイン公爵は、クリスティアーナ姫の事を憎からず思ってるんじゃないかしら。彼女と遊んだ事を思い出して、こんな目をするくらいには。

「失礼、少々感傷的になってしまいましたね」

彼は苦笑しつつ、細いグラスに入った飲み物をくれた。匂いから判断するにお酒だろう。あたし、

まだ未成年よ？

例のゲームにお酒を飲む場面は出てこなかったけど、この国の法律はどうなっているのだろう。

前世では酔っぱらうといろいろ失敗してしまう方だったから、お酒は苦手だ。

「わたくし、お酒はあまり好きではないの」

「そうですか、残念です」

彼はそう言って、近くを通ったウェイターみたいな人にグラスを渡した。積極的に吞ませたかったわけじゃないらしい。

「ねえ、わたくしに一体なんの用事かしら」

あたしは単刀直入に聞いてみた。すると、彼は言いにくそうに口にする。

「……あなたが、死んだ弟によく似ているので」

予想外の事を言われて、口をあんどりと開けそうになった。でもそんなはしたない事をしていい立場じゃないから、目だけを大きく見開く。

「王女殿下に弟を重ねるのは無礼だと思えますが、その、目の色が弟によく似ていました。つ

い……」

シュヴァンシュタイン公爵は、さみしそうに笑った。

「弟はまだ幼かったんですよ。たった九歳で盗賊にさらわれて……見つけた時にはもう死んでたんです。それはひどい有様で……すみません。うら若い姫君にするような話ではありませんね」

「弟君と、仲がよろしかったんですね」

「いえ、どちらかというど険悪でしたよ。何しろ弟は叔父によく似ていましたから」

公爵様の叔父といえど、公爵家に嫁いだあたしの大叔母様の次男で、ろくな噂がなかつた人だ。ひどい飲んだくれで、しょっちゅう事件を起こして捕まっていた気がする。

そんな人に似ていたなんて、この人の弟もろくな人間じゃなかつたのね。「でも豪胆ごうたんというか……無謀むぼうなほど勇敢でした。この子が成長したら、どれだけ素晴らしい男になるのか。幼いながらにそう思ってしまったほど、将来有望な子でしたから」

彼の声からは死んだ人を悼む感情と、隠し切れない好意が感じられた。

「そういう部分も、叔父によく似ていましたね」

そう言つて微笑む彼からは、嫌な感情が読み取れない。

叔父君もお酒を飲んでいない時は尊敬できる人物みたいね。少し印象がよくなつたわ。

「剣の腕も年上の私が齒が立たないほどだったんですよ。悔しかつたですね。……嫉妬にかられて喧嘩けんかばかりしていましたが、もつと自分から歩み寄つていけばよかつた」

「どうして、そんなお話をわたくしにするのかしら」

「ご気分を害されましたか？」

「死んだ人間に似ていると言われても嬉しくないわ。それも男の人に」

シュヴァンシュタイン公爵はそうですね、とあつさり同意する。そして彼は人に呼ばれてどこかへ行き、あたしが暇つぶしに話せる相手は一人もいなくなつてしまつた。

そりゃ誰からも嫌われているような女の子と、積極的に話したい人なんていないわよね。

あたしは足が悪い事とクリステイアーナ姫に決して勝てない事が原因で、厄介な癩癪しかじや持ちになつてしまつていた。クリステイアーナ姫の前では素直な妹を演じていたけれど、それ以外の人の前ではヒステリックで被害妄想の激しい女の子。二面性ありまくり。

しかし暇だわ。話しかけてくれる人がいないと、夜会つてこんなつまらないのね。「イリアスがいればいいのに」

そんな独り言を呟く。……でもまあ、しょうがない。いくら命の恩人でも、どこの馬の骨とも知らない彼を公式な場所に連れてくるわけにはいかないもの。

それにしても退屈。何か面白いものはないかしら。

ダンスフロアを見れば、クリステイアーナ姫が何人目かわからない相手と踊つていた。

桃色がかつた金髪がふわりふわりと揺れている。あの人はノーゼンクス公だわ。

彼はこのバスチア王国の中で唯一の自治区、ノーゼンクス地域を統治している有力者。少年のような見た目をしているけど攻略対象の中では一番年上で、確か二十八歳だつたはずだ。

甘い顔立ちと柔らかな瞳をした彼には桜色が似合う。ゲームではこの人がさりげなく口にした言葉で落とされるご令嬢が多数いた。まるつきり自覚のない女つたらしだつたのだ。

にこりと笑えば、周りに花が飛んで見える。そんな彼とも、あたしは接触した事がない。向こうがこつちを知っているなんて事も絶対にない。

……もしかして、クリステイアーナ姫はこの夜会で攻略対象全員とダンスを踊るのかしら。ゲームにはそんな展開はなかつたはず。隠しルートにもなかつたわよね……おかしいな。

そう考えつつダンスフロアを眺めていたら、視界の上の方で何かが動いた。すっと視線を上げてみれば、シャンデリアがふらりふらりと揺れている。

豪華なクリスタルがこれでもかと使われていて、めったに消えない魔法の焰ほのおによって燦然さんぜんと煌めくシャンデリア。それが奇妙に揺れていた。

風のせいではないとすぐにわかる。風はそよとも吹いていないし、他のシャンデリアも揺れていない。

じゃあどうして……？

何気なくシャンデリアの下を見ると、そこではクリスティアーナ姫が踊っていた。

もう一回天井を見上げてみたら——揺れているのは別のシャンデリアの上に、誰かが座っている。真っ黒な外套がいとうを着て、フードを深く被っていた。顔は見えないけれど、細身で身軽そうな人物だ。

ものすごく嫌な予感がする。

クリスティアーナ姫を、あそこから遠ざけなくちゃ。そんな風に思った時だ。

フードを被った人が、何かを投げた。それはシャンデリアをぶら下げている鎖に貼りつく。

まさか……シャンデリアを落とす気？

血の気が引く。クリスティアーナ姫が危ない。近衛兵このえひを呼んでも間に合わない。彼らが駆けつける前にシャンデリアは落下するだろう。その下敷きになればクリスティアーナ姫は即死だ。

どうしたらいいかわからない。でも、どうにかして彼女をあそこから遠ざけなくちゃ。

焦った頭に、ある考えがひらめいた。

あたしは被害妄想の激しい、ヒステリックな王女様。そのイメージを利用すれば、クリスティアーナ姫をシャンデリアから遠ざけられる。

目立つのは十分わかっているのだ。でもやらなくちゃいけない。

あたしは目を見開いて椅子から立ち上がり、杖を片手に足を引きずりながら彼女に近寄った。

「お姉様！」

なるべくヒステリックに聞こえるように、裏返った声で叫ぶ。

「どういう事です!?! どうしてその方と踊っているんですか!」

そう言いながら勢いよく彼らに詰め寄った。踊っていた二人は気圧けおされ、自然と後ろに下がる。

「わたくしから、何から何まで奪うのですか!」

「バーティミウス? 何を言っているの?」

「クリスティアーナ姫、彼女は一体……?」

怪訝けげんそうなくクリスティアーナ姫と、いきなり現れた無料ぶらな女に眉をひそめるノーゼンクレス公。

よし、いい感じだわ。そのままそこから離れて。

また一歩近寄れば、彼らも下がる。そうやって、二人をシャンデリアから遠ざけていく。

がっしょんと、何かが上から落ちてきた。それはシャンデリアに使われているクリスタルのうちのひとつだった。

——まさか。

反射的に見上げたら、さつきと同じところに座っているフードの人が、にやりと笑った。ばちん、とその人が指を鳴らすと、軽い爆発音がした。

そのクラッカーみたいな音は、オーケストラの音にかき消されるくらい小さかったけど、効果はきめんだった。

シャンデリアの鎖の一部が砕け散る。重さで言えば百キロを超えそうなシャンデリアが、斜めに傾いた。

「落ちないでよ!!」

思わず悲鳴のような声を上げる。シャンデリアはかろうじて落ちなかったけれど、ふらふらぶらぶら危なっかしく揺れている。

その光景に、絹を裂くような悲鳴があちこちから上がった。

「姫君、こちらに!」

ノーゼンクレス公が、クリステイアーナ姫をシャンデリアから遠ざける。

一方、あたしは恐怖のあまり固まってしまった。足が棒になったように動かない。

不安定に揺れていたシャンデリアが、自重に耐えきれなくなって落ちてくる。直撃はまぬがれたものの、砕けたクリスタルの破片なんか飛んできた。とっさに腕で顔を庇う。

「姫さん!」

ぐいと誰かに腰を抱えられて後ろに引きずられる。

その直後、あたしが立っていた場所に、ひときわ大きいクリスタルの破片が飛んできた。当たっ

ていたら確実に怪我をしていたと思う。

助かった。あたしは腰をひねって、助けてくれた人を振り返る。

「いりあす……」

「ああ、間に合ってよかった……」

髭面の大男が、ほっとしたように唇を緩めた。

ざわめきとどよめきが大広間を満たす中、あたしはもう一回天井を見上げる。

あの黒い外套を着た誰かは、もう姿を消していた。

舞踏会は急遽中止された。

その後、近衛兵たちや侍従たちが総出でシャンデリアが落ちた原因を調べたらしい。その結果、シャンデリアの鎖が老朽化していたという結論になったそうである。

あたしはそれを、女官のシャーラさんから聞いた。今あたしに仕えている二人の女官のうちの一人だ。

調査の結果を知って、あたしは呆気にとられた。

シャンデリアの鎖が爆破される音を聞いたのだ、老朽化なんて信じられるわけがない。

「ありえないわ」

あたしはきっぱりと言った。目の前では、イリアスさんが幸せそうな顔でドーナツをばくついている。今は自室に彼と二人きりだ。